

新城市民病院での研修を終えて

豊橋市民病院 研修医 2年目

このたび、新城市民病院で1か月間研修をさせていただいて最も感じたのは、問診や理学所見の大切さです。これはどの参考書を読んでも、どのレクチャーを受けても、最初に強調されることであるにも関わらず、野戦病院での忙しい当直の毎日に慣れていくにつれて、徐々におろそかにしてしまっていました。あまりしっかり患者の話の話を聞かなくても、あまり丁寧に聴診を行わなくても、「血液検査をすればある程度わかる」「どうせあとでCTを撮るから」などといってすぐに検査に行ってしまう自分を見つめなおす良い機会として、ここでの1か月間は非常に有意義な研修であったと感じます。

新城市民病院に来て最初の週から、それは浮き彫りになりました。それは、低血糖の患者が搬送されてきた時のことでした。普段豊橋市民病院で行っていた時と同じように、私は「糖尿病患者の服薬ミス」や「感染症契機にグルコース需要が高まった」等を原因の鑑別として挙げ、診察や問診を行いました。ひととおり診察を終えても、上に挙げたような原因は見つからず困っていると、上級医の先生から飲んでる薬は本当にこれだけかと聞かれました。もう一度詳しく聞き直すと、「シベンズリンコハク酸の内服が始まったこと」「最近になってβブロッカーの用量が減ったこと」をはなしてくれました。シベンズリンコハク酸には低血糖の副作用があり、また、高血糖が起りやすいβブロッカーの減量も相まって低血糖が誘発されてしまった一例でした。初めから丁寧に内服歴を聞いていればすぐに鑑別できていたかもしれません。

また、作手診療所に行かせていただいた時のことです。片麻痺を主訴にやってこられた60代の女性。症状からは明らかに脳血管障害を疑いました。普段であれば、「急いでCTを撮って脳出血か脳梗塞か鑑別して各科にコンサルトだ」となっていたのですが、作手にはCTがないので、CTのある病院へ救急搬送をしなければなりません。そのため、普段よりより一層、問診やリスクの評価、神経所見等が大切になってきます。すぐに画像評価というわけにはいかないため、適当に診察をしては見逃してしまう重症疾患があったかもしれません。

このような環境で研修をさせていただくことにより、私は普段以上に丁寧に問診をとり、診察をすることができるようになったように思います。丁寧に話を聞き、診察をすると、「これは〇〇の病歴だな」「よく聞けば背側には crackle があるな」といったことに気が付くことができるし、画像を評価するときもただ漠然と全部を見るのではなく、身体所見からある程度フォーカスを絞って見ることができます。ここで学んだことを忘れず、日々の診察でも問診や身体所見に散りばめられたヒントを見逃さないようにしようと思います。私の研修にあたり、熱心にご指導してくださった上級医の皆さま、優しく接してくださったコメディカルの皆さま、丁寧にご案内してくださった事務の皆さま、本当にありがとうございました。